2015年 12月発行（35周年記念特別号）通巻 116号

子どもたちの明日

Children, Our Future

2015年 12月 116号

目次

- CYR 35周年に寄せて　1頁
- 35年間を振り返って……　2頁
- 新しい時代を開く子どもたちを育もう　4頁

皆さんのご支援を受けて、子どもたちが楽しく遊び、学べる環境を作るために 35 年間活動を続けています。

CYR 35周年に寄せて

難民の問題が、身近なことになってきました。やがて私たちも政府任せではなく、個人個人の問題として関わることになると思います。幼い難民を考える会(CYR) として 35 年間歩んできた私たちですが、その体験から学ぶことはたくさんあると思います。私も、長い間のかかわりから現在は身を引いておりますが、最も印象的なことを皆さんと分かち合いたいと思います。ご存知のように、カンボジアの難民と呼ばれる人たちは、急進的な社会主義を強行したポル・ポト政権の被害者でした。キリングフィールドという言葉は、現在のシリアでの状況をさらに拡大したようなもので世界中の人々を驚かせました。大量の難民がカンボジアからタイ国境へ雪崩を打って逃げ込んできました。世界中の対応が進む中で、日本からも聖心大学のシスターたちがタイのサケオという村に駆けつけ、緊急救援グループとして働き始めたのが最初でした。そこで多くの子どもたちの言語に絶する悲惨な状況を目にして、長期的なかかわりを目指した私たちの活動は、「希望の家」として難民キャンプで始まりました。

いいぎりゆきさんを中心として、次々と若い女性たちが慣れない難民キャンプに飛び込んで行きました。聖心女子大学も敷地を提供して木造の小屋を建て、キャンプの現地支援にかかわる様々な活動の拠点となりました。すべてボランティアの奉仕活動でした。学園内で大規模なバザーを実施して、その資金が現地へと送られ、現地スタッフの最低限の生活を支えました。その後、カンボジア国内に難民の人たちとともに移り住み、新しい支援活動を展開することになりました。原点は、いつもカンボジアの貧しい農民の家族とその子どもたちへの支援でした。プノンペン近郊の貧しい農村に幼稚園を建てて始まった幼児教育は、やがてカンボジア政府の切実な要請にこたえて、大半の農民が生活する全国僻地へと広まりました。さらに貧しい農村の婦人たちの生活の基盤を求めて、カンボジアの伝統的な染物に目をとめ、さんざんな試行錯誤を経て、今日では日本の染物市場にも高く評価される品物を作成しています。それらを日本で販売することによって、婦人たちの生活を支援しています。

このような活動を振り返ってみて、私が最も印象的だと思うことは、この 35 年間の活動を現地の所長としてずっと支えてきた、関口晴美さんの存在です。彼女は現在も、スレイさんを中心とする十数名のカンボジアスタッフと生活を共にしながら、現地で働き続けています。彼女はまさに自分の唯一の生涯をカンボジアの難民のためにささげているということができます。いつも控え目な晴美さんですから、私の書くこのような文章は嫌いだと思いますが、35 年間彼女と CYR を通してかかわってきた私としては、彼女の存在、人柄なくして私たちの活動は存在しなかったと確信しています。

長期的な難民援助の活動には組織的なかかわりも大切ですが、これからの私たちに最も必要なことは、今後、私たちが日本社会の中で隣人としてかかわる難民と呼ばれる人たちに対して、関口晴美さんのような、やわらかでありながら長い目で一人ひとりを見て、友となっていくことだと思います。

CYR 前代表　深水正勝神父

35年間を振り返って……

皆さまのご支援が、子どもたちのまぶしい笑顔に繋がっています。

これまで皆様からいただいた35年間のご支援が、子どもたちの笑顔に繋がっています。長年にわたってCYR/CYKの活動を支えて下さっている方々から、これまでのCYR/CYKとの関わり、思い出を伺いました。

交野雅博さま（CYR元副代表理事）

1991年に会社役員を退任後、聖心会修道院のシスターの薦めでCYRの活動に参加し、翌年、会社の同僚の大川君に監査役として参加して貰いました。1997年には初めてカンボジアの現地を訪問、さらに2002年に大川君と二人で再度、現地を訪問しました。CYKが援助している地方の住民と保育所を見て廻りましたが、農村の子どもたちは食べ物にも事欠く状態でCYKの援助を待って、はじめて朝食が食べられるような日々を送っていたことが印象的でした。

松岡玲子さま（CYR元理事）

1980年代、現代表のシスター廣戸に声をかけられて支援を始め、難民キャンプも訪問しました。当時は、聖心女子大学内に場所とテントをお借りして、バザーを開いて活動資金を集めました。支援者からも沢山の物資をご寄付頂き、狭い事務所の中で販売準備をして当日は全員で協力して運びました。また毎年、聖心女子大学カンターテドミノの皆さまがクリスマスの時季にグレゴリア聖歌によるミサを捧げ、その献金をCYRにご寄付下さっており、私もお手伝いしています。今年で25回目を迎え、沢山の方々が参加される大切な行事となっています。

東日本大震災の時にも同級生がすぐにチャリテイコンサートを企画、寄付をしてくれたことがありました。私の活動を友人も知っており、このような支援を頂きました。何をするにも援助に繋げるには「継続」が重要だと強く感じました。

渡辺恵子さま（事務所ボランティア）

1990年頃、知人を通じてCYRを知りました。当時の事務所は信濃町駅から数分歩いたところの質素な建物。事務所のボランティアはカンボジアに対する熱意に溢れ、私も一生懸命働いたことを覚えています。その後、事務所は移りましたが、それぞれの地に愛着を感じてボランティアを続けています。事務所で多くの方と接し、私自身もCYRに育てられたような親しさを感じています。

最近は新聞や雑誌でカンボジアの記事をよく目にするようになりました。学校建設や国の援助などのほか、国際青年交流会議にカンボジアの青年が参加、議論を交わしたという記事を読み、心がとても明るくなったことがありました。教育を受けた青年達が世界に出てゆく姿。もしや、CYKの保育所から巣立ったのでは…とも思い、嬉しくなりました。

成澤貴子さま（難民キャンプボランティア）

難民キャンプを訪れたのは1982年春。第3国への移住を待つ人々が多数いて、カンボジアから逃れてくる人も後を絶たない時期でした。

希望の家で洋裁を教えていたハンさんの移住が決定した時、お別れの食事会に招待されました。食事会の費用を捻出するため、お金に替わる唯一の持ち物であった腕時計を売ったと後に聞きました。それほどまでに人々との別れを大切にしたのです。また、通訳として働く小児麻痺で半身付随となった若者も印象的でした。彼は歩くのが不自由そうでしたが、他の男性スタッフとスポーツをし、周囲の人々の接し方も自然で障害者の社会参加を意識する必要がないほどでした。

20代前半の未熟な私は、難民だったカンボジアの人々から多くを学びました。そのような機会をくださったCYRに心から感謝していますし、このような貴重な活動が長く続くことを祈念いたします。

福永恭子さま（CYR元職員）

私が保育事業調整員として駐在したCYRタイ事務所に日本人は私1人。経験も少なくタイ語も下手な私を職員や保育者たちが温かく迎えてくれました。活動地は貧しい農村でしたが、生活力の高い農民、地域全体で子育てができる環境、自給自足の生活など本当の「豊かさ」がありました。この時学んだ「平和は子どもたちから」という言葉は忘れられません。帰国後は東京事務所で広報や国内事業を担当しました。仕事量が多く大変でしたが、夜遅くまで作業したり議論したりと充実していました。人生の先輩であるボランティアの方々から学んだ事は私の大切な財産です。

ニュースレターを読むと、今までの活動が確実に根付いている印象があり、嬉

子どもたちが集まると、どんなところにも新しい遊びが生まれます！

しく思います。国の経済発展に伴う格差の広がりから、都市部の貧困など新しい問題が出てきています。今こそ CYR の地道な活動が必要だと期待しています。

岡田知子さま（元CYKアドバイザー）

難民として日本に来たカンボジアの青少年と知り合ったことを機に、大学３年生の夏休み、難民キャンプを訪れました。カンボジアの方々と関わりたいという気持ちは強かったものの、経験も技術も資格もなく、言葉もできない私が現地に行って分かったのは「自分ができることは日本にもある」ということでした。東京外国語大学の教員となってからはカンボジア語の資料や教本、絵本や歌などの翻訳を学生に指導したり、CYR/CYK にインターンを推薦したりしています。

長年カンボジアと関わり、自分の中に日本人の価値観の他にカンボジア人の価値観が生まれ、自然と物事を多面的に捉えられるようになったと思います。カンボジアと日本の若者に伝えたいのは目の前の課題を１つずつ丁寧にこなせば、しっかりしたキャリアを築けるということ。日々の努力が報われると実感できる仕事を皆ができるようになってほしいと思います。

峯村里香さま（CYR元事務局長）

鉄条網で囲われた難民キャンプに国境を越えて逃げ込む人々。大人たちからは将来が見えない不安が感じられました。そのような中でも元気に遊び、楽しそうに過ごす子どもたちの笑顔とたくましさが印象に残っています。

カンボジア駐在中に起きた首都での市街戦のことは今でも忘れられません。戦争は簡単に人の命を奪うと身をもって知り、CYR の活動の意義を再認識しました。また、東京事務所では全国の会員、支援者やボランティアの温かく、大きな支えにいつも助けられました。

最近の報道でカンボジアの発展を見ると嬉しくなります。また、教育を受け、子どもたちのために熱心に働く CYK 職員を見ていると希望を感じます。設立以来の夢であった「カンボジア人による活動」もいよいよ始まりました。子どもたちの平和な未来のため、これからも日本から応援したいと思います。

プロム・ブントゥアン（CYK職員）

CYK で働き始めてから 25 年、様々な経験をしました。楽しかったことも、日本人と働くのが難しいと思ったこともあります。日本には幼児教育について色々な考え方があり、日本人専門家が派遣されるたびに方針が変わり、戸惑うこともあったからです。

今、カンボジアは大きく変化しています。大人たちの教育に対する考え方も変わってきました。今は農村の人も子どもの成長に幼児教育が重要だと理解して、保護者が保育所に寄附をしてくれるようになりました。人々の生活が少しずつ豊かになり、子どもたちの教育や将来に目を向ける心の余裕ができたのだと思います。日本の皆さんのご寄附によって私たちは活動を続けることが出来ています。心から感謝しています。

新しい時代を開く子どもたちを育もう

1980 年、戦争を知らない日本のボランティアがタイのキャンプにやってきました。有刺鉄線の内側 に住む 10 数万人の日々は、内戦と強制労働、虐殺や飢えを逃がれた安堵と断念、混沌の渦でした。延々と連なるニッパ椰子の小屋の一角に、幼い難民を考える会 * は、遊びながら学べる竹の教室と広場を用意しました。過酷だった子どもたちの日々を、新しい時代に備えるための第一歩でした。

11 年後、難民が帰ると決まったカンボジアに、支部 CYK** が誕生しました。貧しい子どもたちへの保育支援の始まりです。難民が対象の外部からの人道援助ではなく、カンボジアの人たちが自ら推し進める、農村やスラムでの開発援助が目標でした。しばらくしてカンダール州二つの村に、最初の保育所を開きました。CYK は予算がない政府に代わって、各地の公立幼稚園にも、教材を届け、保育する人を育てました。

現在、めざましい国の復興を支える力は、外国の援助や投資です。貧困対策とされた教育の成果も見えてきました。子どもの教育こそ、生活を良くする前提だとわかると、幼いうちに読み書きを習わせ、学校の成績があがるようにしよう、と思う親が増えるのは自然のなりゆきです。貧しい村の出稼ぎの親、その親の世代には考えられなかった社会環境の変化です。地域が財政難の政府に頼らずに、自分たちで保育を開きたくても手立てがない。そんな声を知ったのは、CYK による地域調査でした。

今年４月、カンボジア職員中心の体制に改めた CYK は、チャン・スレイ所長をリーダーに、保育の場づくりの活発な準備を進めています。大切なのは幼児の数、村民の関心度、自主運営の見通しです。CYK が開く「村の幼稚園」は、短時間保育で運営支援は３年間。４年目からは地域の自主運営が条件です。責任分担は、地域が建物、保育者と給与を確保、CYK が保育者養成、教材、補助食、実践評価、健康指導。保護者が僅かな協力金を払います。「村の幼稚園」は 2011 年以来、カンダール、タケオ州の９村に開設され、今後も候補地を広げる予定です。

もうひとつの事業、織物・染め技術指導は、村の女性の現金収入を増やすのが目的です。絣織や自然染料づくりを農作業の合間にする仕事ですが、見返りの少ない家内作業に見切りをつける人が多いのが悩みです。手作業の美しさ、伝統文化の保存には、相応の価値を認めて保護する仕組みがなく、技術の継承は先細りです。しかし保育の場づくりと染織指導には、注目したい展開もあります。CYK が絣織り技術を自負する染織分野で、初の独自企画を考えたのです。来年１月にカンボジア国立博物館で開かれるピダン絵絣展です。ピダンを、カンボジアの文化遺産としてユネスコに登録申請する政府を支えるためです。展示予定の 10 点は、いずれも CYK の織り手による秀作です。問題は、展示設備に必要な 30 万円の資金確保です。少ない期日までに額を集めようと、CYK は奔走しています。ここに読者のご協力をお願いできれば幸いです。

さて CYR/CYK の 35 年目は、役割展開の大きな節目でもあります。政府から辺境の村への活動を望まれる CYK は、「村の幼稚園」方式を国のモデルとなし得るのか。展開の選択肢にあるのは、1）政府の方針に添う保育の普及、2）地域開発である「村の幼稚園」モデルのありかた、3）事業資金確保の方法、4）災害復興支援の枠組みを残すか、などです。 次の世代に向けた険しい道のりですが、仕事を支えるたくさんの人の願いと社会の要請がひとつになった勢いを感じています。

いいぎり ゆき

* 幼い難民を考える会、CYR (Caring for Young Refugees) 1980 年東京で発足。タイ国境で、カンボジア難民とタイ被災村支援用人材・資金を募り、1992 年まで人道援助活動にあたる。

**CYK (Caring for Young Khmer) 1991 年プノンペンで発足。CYR 傘下でカンボジア農村部の保育と染織部門の開発援助活動を続ける。

CYR 情報

2016 年カレンダー「カンボジアの子どもたち」

引き続き、販売中です。購入をご希望の方は、CYR（Tel: 03-6803-2015）までお問い合わせください。

2015 年 12 月 21 日（月）18 時～

“ 幼い難民を考える会 ” のために
グレゴリオ聖歌によるクリスマス暁のミサと小コンサート

主催： CANTATE DOMINO
後援： JCDA 日本合唱指揮者協会
場所： 聖心女子大学聖堂 渋谷区広尾４－３－１
地下鉄日比谷線 広尾駅２番出口 徒歩５分

子どもたちの明日 116 号
発行日：2015 年 12 月 16 日　発行者：廣戸 直江

特定非営利活動法人幼い難民を考える会
東京事務所（CYR）
〒110-0016　東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 2A
TEL: 03-6803-2015　FAX: 03-6803-2016
Email: info@cyr.or.jp　URL: http://www.cyr.or.jp/

プノンペン事務所（CYK）
#170, St.63, Boeung Keng Kang I, Khan Chamkarmorn, Phnom Penh, Cambodia
TEL: (+855) 23 210849　FAX: (+855) 23 210849
Email: info@cyk.org.kh　URL: http://cyk.org.kh/

幼い難民を考える会（CYR）は認定 NPO 法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。